



Title	『源氏物語』第一部の構造：<もののさとし>の機能をめぐって
Author(s)	藤井, 由紀子
Citation	詞林. 1998, 23, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67411
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『源氏物語』第一部の構造

—「もののさとし」の機能をめぐつて—

藤井 由紀子

はじめに

「源氏物語」の長い作中年月の中で、「もののさとし」は、たつた二回しか起らなかった。須磨・明石巻と、薄雲巻と。

従来、この二つの「もののさとし」は並べて論じられることが多いが、一方の読みを補完するためにもう一方が利用されたにすぎないことが多く、統一的な把握はなされてこなかつた。殊に、須磨・明石巻では、光源氏の側に起こつた暴雨に重きを置きすぎるばかりに、朱雀朝に対する「もののさとし」は見過されがちであつた。

較べられなければならないのは、朱雀・冷泉両朝廷に対し起こつた「もののさとし」だ。そして、この二つの「もののさとし」が「源氏物語」の中で果たす機能を考えていかなればならない。

まず、それぞれの「もののさとし」が、どのように物語に描かれているのかを見ていく。最初の「もののさとし」は、須磨の地で起こる暴雨が発端となる。

弥生の朔日に出で来たる巳の日、(中略)海の面うらうらとなぎわたりて、行く方もしらぬに、来し方行く先思しつづけられて、

源氏八百よりづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなれば

とのたまふに、にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。

(須磨二〇九頁)

源氏の歌に呼応して起こる天変は、その後「雨風やまず、雷鳴り静まらず、日ごろになりぬ」(明石二二三頁)と、雷雨となつて数日間おさまらなかつたことが記される。ここで注意せねばならないのは、これら須磨で起こる天変は一切「もののさとし」とは呼ばれないことだ。須磨の暴雨は「ものの

さとしではない。では、何を以て「もののさとし」とすればよいのか。

京にも、この雨風、いとあやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞こえはべりし。

（明石二二四頁）

須磨で始まつた暴風雨は、都にまで及び被害著しいことが語られる。そして、その都の暴風雨こそが「もののさとし」なのだ。「もののさとし」は朝廷に対して起る。須磨の暴風雨は、朱雀朝に対する「もののさとし」の裏面にすぎない。次に起る薄雲卷の「もののさとし」と比較するためには、朱雀朝で何が起つたのかをこそ見ていかなければならぬ。

・その年、朝廷に物のさとしきりて、もの騒がしきこと多かり。（中略）太政大臣亡せたまひぬ。ことわりの御齡

なれど、次々におのづから騒がしき事あるに、大宮もそこはかとなうわづらひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内裏に思し嘆くことさまざまなり。

（明石二四二頁）

・去年より、后も御物の怪悩みたまひ、さまざまの物のさとしきり、騒がしきを、いみじき御つしみどもをしたまふしるしにや、よろしうおはしましける御日の惱みさへこのごろ重くならせたまひて。（明石二五一頁）

以上が明石卷での「もののさとし」の全用例であるが、その

結果として起つたこととして①太政大臣（元右大臣）の死②弘徽殿大后的病気が挙げられよう。朱雀帝の眼病は、夢枕に立つた故桐壇院に睨まれたためのものであるからひとまず除くにせよ、その後彼が譲位する際に、その理由を「大臣亡せたまひ、大宮も頼もしげなくのみ篤いたまへるに、わが世残り少なき心地するになむ」（瀬標二七〇頁）と語ることから、③朱雀帝の退位を付け加えても問題なからう。

それでは、対する薄雲卷では何が起つてゐるのか。

その年、おほかた世の中騒がしくて、公ざまにものさとしげく、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月

日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ世の人おどろ

くこと多くて、（薄雲四二三三頁）

薄雲卷での天変は空に現われる。そして、明石卷と同じく人事にも影響は及ぶ。

・そのころ、太政大臣亡せたまひぬ。

（薄雲四三三頁）

・入道後の宮春のはじめより悩みわたらせたまひて、三月には、いと重くならせたまひぬれば、行幸などあり。

（薄雲四三三頁）

・燈火などの消え入るやうにてはてたまひぬれば、

（薄雲四三七頁）

・その日式部卿の親王亡せたまひぬるよし奏するに、

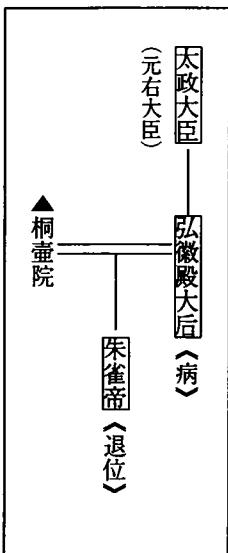
（薄雲四三三頁）

冷泉朝に対する「もののさとし」が、その結果として引き起

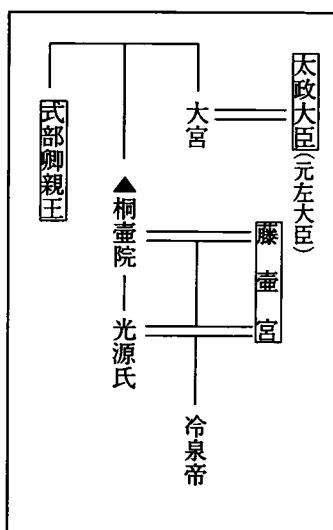
こしたことは、①太政大臣（元左大臣）の死②藤壺宮の死③式部卿親王の死である。

太政大臣と帝の母后が、共に物語の表舞台から退場するという点において、二つの「もののさとし」は酷似している。が、その一方で、朱雀帝と冷泉帝の運命には大きな隔たりがあり、それこそが從来の最大の論点であった。何故朱雀帝は退位にまで追い込まれるのに対し、冷泉帝には実質的な咎めが何もないのか。罪の子冷泉のその罪は解消したのか。そもそも「もののさとし」とは何なのか。これらすべてを解決するためには「罪」という問題に捉われるのではなく、もう一度「もののさとし」で何が起こったかを詳細に検討していくねばならない。

まず、明石卷の「もののさとし」。



系図の上で確認すれば、明らかに旧右大臣勢力が「もののさとし」によって排除されていることがわかるだろう。薄雲卷の「もののさとし」はどうか。



死去した人物を並べてみると。すると、いずれも桐壺院に近しい人々であることに気付く。太政大臣は桐壺院の妹大宮を妻に持ち、その治世を支えた第一の臣下であるし、式部卿親王は弟、藤壺は妻である。いわば、桐壺帝の全盛期を支えた中心人物が揃ってこの「もののさとし」によって退場させられているのであり、これは桐壺帝勢力の排除、と言えるであろう。思えば、薄雲卷に至って、冷泉帝は初めて自身の出生の秘密を知るのであった。それは桐壺帝の系譜から外れることであった。冷泉帝は排除されるべき系譜に連なってはいない。それこそが薄雲卷の「もののさとし」の論理であり、夜居の僧都の密奏もその上でこそ意味を持つのだ。

二つの「もののさとし」は「ある一定勢力の排除」という

機能を帯びている。では、何故その排除がなされなければならなかつたのか。それは今まで、光源氏の榮華の為、と、ひとまずは考へられてきた。明石卷では源氏の帰京の為、薄雲卷では源氏の潛在王權の為、と。しかし、二つの「もの」を「とし」を繋ぐある人物に注目したとき、物語は新たな様相を呈し始める。

二、浮かび上がる秋好中宮

明石卷の「もの」の「とし」の後、薄雲卷で「まことや」という言葉を以て語り出される一人の人物がいる。六条御息所である。

まことや、かの斎宮もかはりたまひにしかば、御息所上りたまひて後、(中略)かの六条の古宮をいとよく修理しつくろひたりければ、みやびやかにて住みたまひけり。

(薄標二九九頁)

「まことや」についてはすでに諸氏により検討がなされており、詳細な定義はそちらに譲るにせよ、非常に唐突な話題転換がなされた印象を我々に与える言葉であることに間違はない。

ながろう。ここでも、六条御息所は伊勢下向以来、久しうぶりに物語の表舞台に引きずり出されたわけであり、そして引きずり出されるやいなや、病氣となり死んでしまう。彼女が残したもののは源氏への遺言と、その娘後の秋好中宮であつた。

源氏は「心細くてとまりたまはむを、必ず事にふれて数まへきこえたまへ」「かけてさやつた世づいたる筋に思し寄るな」(薄標三〇一頁)という御息所の遺言に従つて、薄雲卷末に至つて秋好中宮の冷泉帝への入内計画を持ち上げるのであつた。

一方、薄雲卷の「もの」の「とし」の後、密通の事実を冷泉帝が知つたのでは、と恐懼した源氏が、王命婦を訪ねたその後直後。

斎宮の女御は、思しも著き御後見にて、やむごとなき御おぼえなり。御用意、ありさまなども、思ふさまにあらまほしう見えたまへれば、かたじけなきものにもてかしづききこえたまへり。

(薄雲四四八頁)

ここで唐突に語り出されているのは、誰であろう、初めの「もの」の「とし」の後同様、秋好中宮その人であることに注目しなければなるまい。

二つの「もの」の「とし」の後、いづれも唐突に浮かび上がつてくる秋好中宮。しかし、「唐突」に思えるのは、我々が源氏の側に寄り添つて物語を読み進めているからにすぎない。

薄雲卷で彼女が物語の表層に浮かび上がつてくるのは斎宮の交替があつたからである。何故斎宮が替わつたのか。それはまさに「もの」の「とし」によって朱雀帝が排除されたからである。朱雀帝から冷泉帝への御世替わり。そのことが彼女

を物語の舞台である都へと召喚したのである。

また、薄雲卷。もともと「大人しき御後見」(澤標三一一页)として入内した彼女である。冷泉帝の母であり最大の庇護者であつた藤壺の死去によつて、「思ししきも著き御後見」としてのその役割がクローズアップされるのは、当然の成り行きであろう。そして、藤壺の死もまた、「もののさとし」によつて招かれたものであることをおさえておかなければならない。

つまり、秋好中宮は、「もののさとし」の排除の結果、必然的に浮かび上がつてくる人物として設定されているのである。それは、源氏の「潜在王権」などという曖昧な榮華と異なり、明確に物語の上に存在している事実だ。秋好中宮こそが「もののさとし」を通して、着実にその榮華を実現していく。それを見過してはいけない。

三、六条一族と明石一族

澤標卷には、実はもう一つ、「まことや」によつて語り出される挿話がある。明石姫君誕生の物語である。

まことやのかの明石に心苦しげなりしことはいかに、と思し忘る時なれば、(中略)三月朔日のほど、このころやと思しやるに、人知れずあはれにて、御使ありけり。とく帰り参りて、使「十六日になむ。女にてたひらかに

ものしたまふ」と告げきこゆ。 (澤標二七五頁)

阿部好臣氏は「まことや」で語り出される挿話を「光源氏の日常を正の世界(物語の主流となる軸)とすると、反世界(異質な軸)とでも呼べ、そうな世界⁽³⁾」と位置付けられた。思えば、源氏の明石行きは、「もののさとし」の裏面としてあつた都で相次ぐ凶事の裏で、生をうけたのがこの明石姫君であり、彼女はいわば「反世界」の住人なのだ。そしてその「反世界」こそが、実は「もののさとし」によつて浮かび上がつてくる世界であり、明石姫君と秋好中宮はその中に對として存在していると言えよう。

先に挙げた薄雲卷での秋好中宮の登場の場面。その後彼女は源氏と対面するのだが、そこで源氏は次のような依頼をする。

数ならぬ幼き人のはべる、生ひ先いと待ち遠なりや。かたじけなくとも、なほこの門ひろげさせたまひて、はべらすなりなむ後にも数まへさせたまへ。 (薄雲四五一頁)つまり、源氏は秋好中宮に、明石姫君の後見を頼んだわけであり、ここで二人の女君は分かちがたく結びつくこととなる。

従来、六条一族と明石一族には、何らかの血縁的繋がりがあるのではないかと指摘されてきた。もちろん、物語の上に決定的な根拠を見出だすことはできない。しかし、血縁関係までは確定できなくとも、彼らが密接に繋がり合つてゐること

とは確かだ。その数ある証拠の中で、特に今までとりたてて注目されなかつた箇所を挙げてみたい。

内裏の帝御位に即かせたまひて十八年にならせたまひぬ。
(中略) 日ごろいと重く悩ませたまふことありて、にはか
におりみさせたまひぬ。(中略) 六条の女御の御腹の一の
宮、坊にゐたまひぬ。さるべきこととかねて思ひしかど、
さしあたりてはなほめでたく、目おどろかるるわざなり
けり。

(若菜下一五七頁)

明石姫君は、六条女御である。その呼称は一度しか用いら
れないが、だからこそその使用された箇所に注目したいの
だ。冷泉帝の退位と、今上帝の即位。それに伴つて、明石姫
君腹の一宮が東宮に決まる場面である。それは、明石姫君が
やがて国母となることを示しており、まさに明石一族の悲願
達成の場面であるのだが、何故ここで彼女は「六条の女御」
と呼ばれなければならないのか。それは「六条院は完全に明
石一族のものになつてしまつたことを示す」ためであること
に間違いはないのだろう。しかし、その呼称が我々にもつと
直接的に呼び起こすのは、六条御息所の存在ではなかろう
か。明石姫君が帝の女御になるということは、秋好中宮がそ
の座を譲り渡すことに繋がっていく。子をなすことなく宮中
を去つていく秋好中宮。それは六条一族の敗北であろうか。
いや、そうではあるまい。その遺志は、秋好中宮から明石姫君
に受け継がれた。だからこそ、彼女はたつた一度だけの呼

称で呼ばれるのだ、「六条の女御」と。その呼称は六条御息所
こそが呼ばれるはずであつた呼称なのだから。

「へもののさとし」によつて浮かび上がる「反世界」の中で
二人の女君は重なり合つて一族の遺志を実現していく。排除
される人々と、浮かび上がる人々と。「へもののさとしに
よつて正反対の運命を歩むことになる両者には、しかし、一
つの接点を見出だすことができるるのである。

四、「へもののさとし」と桐壺更衣

須磨卷において、明石入道は、まだ見ぬ源氏に我が娘を嫁
がせようと計画し、その根拠として、自身と源氏との血縁関
係を擧げる。

故母御息所は、おのがをぢにものしたまひし按察大納言
のむすめなり。

(須磨二〇三頁)

桐壺一族と明石一族には確かな血縁関係がある。阿部好臣
氏は夙に両者の関係に注目され、「桐壺一族の意志は、藤壺
物語には欠落してしまつた部分を、明石物語に継承せんとして
いる」と言われた。また日向一雅氏は「二つの「家」の遺
志はほとんど相似形であった」と説かれている。ここに六条
一族を加えても、何の問題もなかろう。共に物語の始発にお
いては没落しており、女系によつて家の復興をなそうとす
る。いわば、秋好中宮と明石姫君は、桐壺更衣の系譜に位置

付けられる女君なのだ。明石入道の発言の続きを引こう。

いと警策なる名をとりて、宮仕に出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと並びなかりけるほどに、人のそねみ重くて「せたまひに」しかど、この君のとまりたまへる、いとめでたしかし。　（須磨一〇三頁）

ここでは、この発言が、ただその血縁関係を述べるにとどまらず、桐壷卷における更衣の悲劇にも触れる内容になつてゐることに注目したい。そしてこのすぐ後に最初の「ものさとし」の発端となる、須磨の浜辺での暴風雨が起つてゐるのである。

また薄雲卷でも、ここでは明石尼君の発言の中に、桐壷更衣にふれる箇所がある。

母方からこそ、帝の御子もきはぎはにおはすめれ。この大臣の君の、世に二つなき御ありさまながら世に仕へたまふは、故大納言の、いま一階なり劣りたまひて、更衣腹と言はれたまひしけぢめにこそはおはすめれ。

（薄雲四一九頁）

実の娘を紫上に託す決心のつかない明石上を説得する尼君の

言葉は、やはり身分の低い桐壷更衣の悲劇を暗示させる内容となつていて、しかも、須磨卷同様、この直後に「ものさとし」が起つてゐるのである。物語の上に桐壷更衣がその影を落とすと、必ず「ものさとし」が起つて、これを單なる偶然として片付けてよいのであろうか。

「源氏物語」において、死人の噂話をすることが、その魂を現世に呼び出すきっかけになることは、いわば物語の論理のようになつてゐる。例えば藤壷が、例えば六条御息所がそううだつた。ここで「ものさとし」を桐壷更衣が引き起こしている、などといつもりは毛頭ない。しかし、ここに、桐壷更衣の、いや桐壷一族の遺志の発露とでもいべきものを見出だすことは可能であろう。

藤井貞和氏は、「源氏物語」の第一部がそもそも桐壷更衣一家の「遺言」実現の物語になつてゐる⁽⁸⁾と説かれた。「遺言」とは源氏を帝位に即かせることであり、そしてその実行者として、藤井氏は桐壷帝を設定された。しかし桐壷帝が関知し得るのは少なくとも最初の「ものさとし」までではないか。

確かに、桐壷帝の遺言は源氏の生き方を強く規定するものではあつた。しかしそれすらも桐壷更衣の意図したのとは、逆の方向に作用しているのだ。例えば薄雲卷。冷泉帝から讓位を仄めかされた源氏は次のような理由でその意見を退ける。

故院の御心ざし、あまたの皇子たちの御中に、とりわけ思ひしめしながら、位を譲らせたまはむことを思ひしめし寄らずなりにけり。何か、その御心あらためて、及ばぬ際には上りはべらむ。ただ、もとの御撫てのままに、朝廷に仕うまつりて、

（薄雲四四六頁）

桐壷帝の存在は、源氏を皇位から遠ざける。そもそも物語の始発において、更衣の死後、一人残された母君が「慰む方なく思ししづみて」（桐壷一一四頁）ついに亡くなってしまうのは、源氏が東宮になれなかつたからであり、そしてその決定を下したのは他でもない桐壷帝その人だつたことを思い出さなければならぬ。桐壷一族の断絶の引き金を引いたその人を、その家の遺志を引き継ぐ人間として設定できようか。

我々は相思相愛の一対の男女として、桐壷帝と桐壷更衣の関係を感傷的に捉えすぎてゐる。村井利彦氏は、桐壷卷前史とでもいうべきものを想定して、桐壷一族をその時敗北を喫した側と捉える。そして「若い桐壷帝は、藤原氏の新勢力に乗つて帝となつたに相違ない。が、一掃した旧勢力に対しても、厭倦たる思いがある。菅原道真事件後の醍醐天皇のように、厭倦たる思いが、敗残の人・更衣への偏愛となつた」と説かれた。桐壷帝と桐壷更衣は、対立する立場にあつた。だからこそ、桐壷帝の偏愛は周囲を巻き込み政治的大問題となり、悲劇の結果を招かざるをえなかつた、と考えるのは自然だ。敗北者は、桐壷一族・明石一族・六条一族。勝利者は、桐壷帝・左大臣一族・右大臣一族。そう思つて、へもののさとしへよつて排除された人々を見ると、それはまさに、桐壷卷時点では勢力を持つていた人々であり、更衣を排除したその人たちであることに気付かざるのである。物語は桐壷帝などという媒介者を置くことなく、もつと直接的に、桐壷更衣

の遺志を「もののさとし」に投影させてゐるのだ。

そして、「もののさとし」の後に浮かび上がる一人の女君は、桐壷更衣一族と繋がり、共に中宮となり、桐壷更衣の遺志を実現する人物である。それは、男であり臣下である光源氏よりも、より直接的に桐壷更衣と重なつていく。物語は、光源氏の榮華を志向するように見せながら、その一方で、桐壷更衣から脈々と流れる女君の榮華の物語を描き続けてゐるのである。

更衣はその最期に歌を詠む。

かぎりとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり。
（桐壷九九頁）

と。「生またい」と願つた女の遺志は物語を貫いてゐる。彼女は六条御息所のような物の怪にはならなかつた。ならなかつたけれども、しかし、物の怪よりももつと強大な力となつて、物語を底から動かし続けてゐるのだ。「もののさとし」はその発露としてある。

おわりに

以上、「もののさとし」の機能を明らかにすることによつて、そこに見出だせる桐壷更衣の遺志、そしてそれを受け継ぐ女君の系譜を辿つてきた。それを桐壷前史へと繋げていくことは容易いが、これ以上の深読みはやめておこう。

桐壺帝・高麗の相人の予言を生きるのが光源氏だとすれば、桐壺更衣の遺志を生きるのが秋好中宮と明石姫君だ。この二つの流れを物語は内に含んでいて、前者が表、後者が裏というのが第一部の構造だ。しかし第二部でこの関係は逆転する。そもそも、前者の栄華は「相人の言空しからず」と書かれる添標卷で一旦終わるのではないか。桐壺院の法華八講は、彼の役割に終止符を打つべく、その魂を物語の彼方へ封じ込めてしまった。藤裏葉巻の栄華は、後者の栄華だ。定説に惑うことなく、今、新たに第一部を振え直さねばならないだろう。

「ものさとし」はその新たな地平を切り開いているのだ。

註

(1) 「ものさとし」及びそれに伴う天変地異に関する論稿は数多いが、今回特に参照したもののみを以下に挙げておく。

須磨・明石巻の天変に関しては、

柳井滋「源氏物語と靈験譚の交渉」(『源氏物語研究と資料—古代文学論叢第一輯』) 武蔵野書院 S 44
林田孝和「源氏物語の天変の構造」(『源氏物語の精神史研究』) 桜楓社 H 5

楓社 H 5)

薄雲巻の天変に関しては、

斎藤暁子「薄雲巻における冷泉帝の罪をめぐって」(『源氏物語と

和歌研究と資料II—古代文学論叢第八輯—』 武蔵野書院 S 57)

浅尾広良「薄雲巻の天変—「ものさとし」終息の論理—」(『大

谷女子大國文』 H 8・3)

(2) 阿部好臣「二つの「まことや」「(『中古文学』 S 49・10)

小林美和子「複線型叙述の物語構造に於る効果」(『国語と国文学』 S 50・12)

田中仁「「まことや」—光源氏と語り手と—」(『国語国文』 S 56・3)など。

殊に六条御息所との関わりを論じたものとして、

吉海直人「六条御息所と「まことや」」(『論集中古文学5 源氏物語の人物と構造』 笠間書院 S 57)

(3) 註2阿部論文

(4) 坂本和子「光源氏の系譜」(『国学院雑誌』 S 50・12)
坂本共展「五つの大臣家と明石入道」(『源氏物語構成論』 笠間書院 H 7) など。

(5) 山田利博「源氏物語正編の骨格—明石一族を視座として—」(『国文学研究』 H 4・6)

(6) 阿部好臣「明石物語の位置—桐壺との関わりにおいて—」(『語文』 S 51・7)

(7) 日向一雅「光源氏論への一視点—「家」の遺志と王權と—」(『源

氏物語の主題—「家」の遺志と宿世の物語の構造』 桜楓社 S 58)
(8) 藤井貞和「神話の論理と物語の論理」(『源氏物語の始原と現在—定本』 冬樹社 S 55)

(9) 村井利彦「桐壺の夢」(『源氏物語の探究 第十輯』 風間書房 S 60)

(10) 桐壺巻での相人の予言が藤裏葉巻で実現するという定説に対し、添標巻で実現することを最も詳細に論じたものとして、

藤井貞和「『宿世遠かりけり』考」（『論集中古文学－源氏物語の表現と構造』笠間書院 S 54）
が挙げられる。

※引用は日本古典文学全集「源氏物語」一〇六（小学館）によつた。

（ふじい・ゆき） 本学大学院博士前期課程